

# ダニエル書 - 第一百七十七番

十四万四千人の封印：ダニエルの幻視と預言的象徴からの洞察

Jeff Pippenger

2024-04-07

ダニエルは第十章で三度触れられた。最初と最後はガブリエルによるもので、真ん中はキリストであった。ダニエルが自らの墮落を最も痛切に感じたのは、その真ん中のときであった。というのも、真理の中間の道しるべは反逆を表しているからであった。ダニエルに二度目に触れたのはミカエルであった。彼は二十一日間の終わりに降臨したからであった。

象徴的な三日半の終わりに、すなわち黙示録第十一章の二人の証人が大通りに横たわって死んでいるその時の終わりに、一つの声が二人の証人をよみがえらせる。よみがえらせるのは御使いのかしらの声である。ダニエル第十章における第二十二日におけるミカエルの降下は、2023年における二人の証人の復活と一致する。二人の証人が大通りに死んだままであった間、エゼキエルは彼らの散らされた骨を示され、谷にあるそれらの死んだ枯れた骨がよみがえることができるかと思うかと問われたが、エゼキエルが答えたのはただ、「主よ、あなたをご存じです」であった。

そのときエゼキエルは、その骨に向かって預言するよう命じられ、彼はそのとおりにした。すると、それらは互いに結び合わされたが、なお生きてはいなかった。エゼキエルの第一の預言は骨を集めることであったが、それらの骨を軍勢として復活させるためには、第二の預言が必要であった。エゼキエルの第二の預言は、骨に命をもたらした四方の風によって表される、第三の災いの預言であった。第一のアダムは完全な者として創造されたが、その後罪を犯し、死をそのすべての子孫に及ぼした。エゼキエルの死んだ骨の復活は、その完全な状態におけるアダムの創造と並行している。というのは、アダムはまず形造られ、それから主が彼の鼻に命の息を吹き込まれたからである。

だからといって、二人の証人が生き返るときに栄光の体を受け取るということではない。それが起こるのは再臨のときまでではないからだ。しかし、彼らの復活は、原因的な「marah」の幻に関するダニエルの幻視と対応しており、彼らはそのとき目にする像へと変えられる。段階を追って、封印の過程は預言的な証言によって非常に綿密に示されている。

黙示録第十一章では、「三日半の後に神からのいのちの霊が」二人の証人のうちに入り、彼らは「自分の足で立ち上がり、彼らを見た者たちに大いなる恐れが臨んだ」。そして「天から大いなる声が彼らに『ここへ上れ』と言ひ、彼らは雲に乗って天に上って行き、彼らの敵はそれを見た。」

まず、霊が彼らのうちに入り、彼らは自分の足で立ち上がった。彼らが立ったとき、かつて彼らの死を喜んでいた敵に恐れが降りかかった。次いで、声が彼らを呼び上げ、敵はその出来事を目撃する。エゼキエルの場合、彼らはまず谷に散らされて死んだ者として示され、次に彼らを集めるという預言が告げられ、さらに第二の預言によって、彼らは強大な軍勢として立ち上がる。ダニエルの場合、まず二つの類への分離をもたらす大いなる幻

を見て、その後、彼は三度触れられる。

最初に触れられたとき、彼には力がなく、深い眠りに落ちており、顔を地面に向けていた。眠りは死を表す。それでも彼は語られた言葉を聞いた。

このことに驚くな。やがて、墓の中にいるすべての者が彼の声を聞く時が来るからだ。  
ヨハネの福音書 5:28

それからガブリエルはダニエルを四つん這いにさせ、さらに立つように命じた。彼は震えながらも立ち上がった。その後、彼はガブリエルの言葉を聞いたが、口がきけなくなっていた。エゼキエルもまたキリストの幻を見て、同様の一連の出来事が起こった。

そして、彼らの頭上の大空の上には玉座のようなものがあり、それはサファイアの石のように見えた。玉座の形の上には、その上に、人のような姿があった。私は見た。彼の腰から上に見えるところには、内から周囲にかけて火のように輝く、琥珀色めいた光があり、また彼の腰から下に見えるところも火のようで、その周りには光が輝いていた。雨の日に雲の中にかかる虹のように、その周りの輝きは見えた。これが主の栄光の似姿の現れであった。私がこれを見たとき、私はひれ伏し、語る者の声を聞いた。彼は私に言った。「人の子よ、立ち上がれ。わたしはあなたに語る。」彼が私に語ると、霊が私のうちに入り、私を立たせたので、私は私に語る方の声を聞いた。エゼキエル書 1:26-2:2。

その幻は、エゼキエルとダニエルの双方を塵にまでへりくだらせ、彼らは地にひれ伏した。その状態にありながらも、彼らはなお主のことばを聞き、彼らに語られたことばを聞くために立たせられた。そして、そのことばを聞いたとき、霊が彼らのうちに入った。神性との結合は、聖霊によって伝えられる神のことばを受け入れることによって成し遂げられる。「ことば」こそが、神性を人間へと伝えるものである。この真理を認識しなければ、ガブリエルがダニエルに第十一章で与える予言的歴史の重大さと意義を理解することはできない。第十一章に示されている予言的歴史は、聖油が賢い乙女たちに運ばれるための導管である。

エゼキエルの場合、彼はただちにラオディキア的アドベンチズムに向けてメッセージを伝えるよう命じられる。しかし彼は最初から、ラオディキア的アドベンチズムは反逆の家であるがゆえに彼の言葉を聞かないと知らされている。エゼキエルの経験はイザヤ書六章のイザヤの経験と同じであり、ゆえに二人の証人によって、神が死の象徴である眠りからダニエルを目覚めさせるとき、ダニエルにもラオディキア的アドベンチズムという反逆の家へのメッセージが与えられるが、彼らは聞こうとしない。

その後、ダニエルは二度目に、キリストご自身に触れられる。キリストは、祭壇の炭でイザヤの唇に触れたのと同じように、ダニエルの唇に触れた。するとダニエルは話すことができたが、なお力はなく、息もなかった。エゼキエルによれば、息は「四方の風」のことばとともに来るが、これはエゼキエルの第二の預言である。エゼキエルの「四方の風」の預言は、ダニエルが三度目に触れられるときと一致している。というのも、そのとき骨に息が入り、彼らは強大な軍勢として立ち上がるからである。ダニエルが強められるのは、この三度目に触れられるときである。

2020年7月18日、神の終末の民は散らされ、たとえ話の待機の時期に入った。封印の歴史は、1844年10月22日から1863年の反逆に至る歴史において例証された。そこで示されている歴史の流れは、2001年9月11日から日曜法に至るまでの歴史と重なっているが、同時に2020年7月18日から日曜法に至る歴史とも重なっている。この預言的な現象は、象徴には複数の意味があり、その意味はそれらが適用される文脈によって決定されるという事実に基づいている。

三人の天使のいずれの到来と働きも、同じ一連の出来事の順序に従う。彼らに関連する預言の封印が解かれる時点で、彼らは到来する。その預言は三つの段階で構成されている。すなわち、その到来、その力づけ、そして最後に戸が閉じられること。歴史の中には他にも道標があるが、三人の天使のいずれの到来においても、試しとなる三つの道標があり、その第一の道標は預言の封印が解かれる時である。封印が解かれたメッセージは確認によって力づけられ、その確認と力づけが、その歴史における男女を試す。歴史の結末は、第三の試しに立つ者たちが賢いか愚かかを示す試金石を生み出す。

2001年9月11日から日曜法に至る歴史の中に、三人の天使を見いだすことができる。第一は2001年9月11日に到来し、第二は2020年7月18日に到来し、第三は間もなく来る日曜法（試金石）のときに到来する。1844年10月22日は2001年9月11日と対応し、1856年は2020年7月18日と対応し、1863年は日曜法と対応する。とはいえ、1844年10月22日から1863年までの期間は、2020年7月18日から日曜法に至る期間とも対応する。というのも、7月18日は封印の歴史における第二の天使の到来であったからである。続く歴史は、各天使の単なる道しるべとして、なお正しく特定されている。

2020年7月18日、その世代を試すべき一つの真理が開封された。その歴史における第二の段階は、二人の証人が復活するときである。その時、彼らは、その時に明らかにされる光、すなわち今まさに進行中のその光を受け入れるかどうかについて試される。次いで、日曜法（試金石）において、だれが賢い処女であり、だれがそうでないかが明らかにされる。私たちがその歴史を、単一の天使の構造として単純に考察し、さらに1844年10月22日から1863年の反逆に至る歴史を、2020年7月18日から日曜法に至る歴史の上に重ね合わせるとき、1849年に、ホワイト姉妹が、主は御自分の民の残りの者を集めるために再び御手を差し伸べられた、と明示したことを見いだす。

1844年10月22日から1849年まで、神の民は散らされていた。1850年、彼らはハバククの二枚の図表のうち二番目のものを作成した。1851年1月には、『Review』でその新しい図表を広告していた。神の民は散らされ、第三の天使が光を携えて現れた。その後、神は彼らを再び集め始め、1842年にそうされたように、彼らが宣べ伝えるべきメッセージを視覚的に表現したものを与えた。1844年10月22日に到来した光は知識の増大であり、それは神の導きのもとに発展し続け、1856年にはその光の要石が示された。その光は「七つの時」に関するもので、それはウィリアム・ミラーが最初に認めた光であり、1844年10月22日に成就した預言の一つとして示されていた。

1856年における「七つの時」の光は、第一の天使の使者であるミラーに与えられた知識の増加の締めくくりであると同時に、1844年10月22日に与えられた第三の天使の結びの光でもあった。1856年にその光を拒んだことは、1798年に封印が解かれた知識の増加の拒

否であると同時に、1844年10月22日に封印が解かれた知識の増加の拒否でもあり、そしてそれは、その時その場でフィラデルフィアの経験からラオデキアの経験へと移行した者たちによって拒絶された。1863年の反逆は三度目であり、試金石でもあり、「七つの時」の光を取り除いた偽の図表によって示された。

1844年4月19日の最初の失望は、神が1843年のパイオニア図表のいくつかの数字の誤りの上に御手を置かれたことによって、第一の天使のフィラデルフィア運動にもたらされた。2020年7月18日の最初の失望は、1844年10月22日にキリストが天に御手を上げて、時はもはや延長されないと誓われたことを人々が無視したために、第三の天使のラオデキア運動にもたらされた。2020年7月18日、この処女たちの世代を試みるためのメッセージの封印が解かれた。1850年の時と同様に、主は2023年に、2020年7月18日以来路上で死んでいたエゼキエルの死んだ骨を集めるために、二度目に御手を伸ばされた。1851年までに、そのメッセージの新しい図表による表現が現れ、それはハバクク書2章の予言の成就であった。こうして、2023年以後、主が、ハバククの二つの表によって象徴される新しい生ける旗印を掲げられることが示された。

ハバククの二枚の板は、十戒の二枚の石板によって、また五旬祭の二つの揺り動かすパンによっても象徴されていた。十四万四千人は初穂の献げ物とされ、彼らこそ、マラキ書にある「昔の日々、古い年月のように」という献げ物を表す者たちである。彼らは、全世界が目にする揺り動かす献げ物として掲げられる。

十四万四千人の目覚めは、彼らが一つに集められることから始まる。そして、その集結は神の言葉によって成し遂げられる。というのも、エゼキエルの死んだ骨は、なお死んだままでありながら、神の言葉を聞くことによって集められるからである。主がその残りの者を集めるために再び御手を伸ばされるとき、エゼキエルは、骨を集めるこのメッセージを告げる人間の器を表している。イザヤ、エレミヤ、ダニエル、ヨハネ、そしてエゼキエルは皆、死んで干からびた骨に神の言葉を伝える人間の器を指し示している。

骨が集められると、主は、恩恵期間が閉じる直前に封印が解かれる知識の増加を啓示される。そしてその知識は、「終わりの日に関するダニエルの預言のその部分」によって表されている。エゼキエルの第二の預言において、封印が解かれる光は第三の禍であり、それは骨に命を吹き込み、因果的にそれらを強大な軍勢として立ち上がらせる東風のメッセージである。ダニエルに啓示される光は、第十一章における北の王によって表される光である。エゼキエルとダニエルは共に、「終わりの日に関するダニエルの預言のその部分」、すなわち（東）の風と（北）の王の知らせを表している。

しかし、東からと北からの知らせが彼を騒がせる。それゆえ、彼は大いなる憤りをもって出て行き、滅ぼし、多くの者をことごとく絶ち滅ぼそうとする。ダニエル書  
11:44

1856年に、主は御自分の民に印を押す御業を完成することを意図されたが、彼らは反逆した。彼らをラオデキヤ的状态から導き出すために主が用いようとした使命は、レビ記二十六章の「七つの時」であった。主が2023年7月に御自分の民を集め始められたとき、主は彼らに再び「七つの時」の使命を提示され、そしてとりわけ、対型的贖罪日にヨベルのラッパが鳴り響くべきであり、その時こそ第七のラッパもまた鳴り響く時であるこ

とを明らかにされた。ヨベルのラッパは「七つの時」の象徴であり、第七のラッパは第三の災いである。ダニエル書第十章においてミカエルが降って来られたとき、ダニエルは、レビ記二十六章の祈りを祈る者たちの経験を得る人々、そしてダニエル書第二章の預言的奥義を理解しようと求める人々を代表していた。

ダニエルは、神の御声によって集められ、その後、東と北の使命を宣べ伝えるために強められて自らの足で立つ者たちを表している。彼らは、まもなく到来する日曜法に至るまで、その使命を宣べ伝える。その軍勢が起こされる過程は、預言のきわめて詳細な主題であり、また、十四万四千人の印に関する成就において、神性が人性と結び合わされ始める時点は、ダニエル十一章十一節に表されている歴史の中で始まった。ダニエル十一章一節から十六節までに表されている歴史は、四十節の隠された歴史、すなわち「ダニエル書の預言のうち終わりの日に関するその部分」を満たすのである。

ダニエル十一章十三節から十五節を考察し始めるにあたり、それが最初に紀元前200年のパニウムの戦いにおいて成就したのであるが、これらの節の重要性を理解することが不可欠である。パニウムは、三つの代理戦争のうちの第三のものである。第一の戦いは、1989年に教皇権とその代理軍であるアメリカ合衆国の勝利をもって終結した。次の戦いは、十一節と十二節によって表されており、ラフィアの戦いによって成就したものであるが、南の王（ロシア）は、ウクライナにおいて北の王とその代理軍を打ち破るであろう。第三の戦いは第一の戦いと同様に、教皇権（北の王）が、その代理軍（アメリカ合衆国）を伴って、共産主義（国際連合）に打ち勝つことになるであろう。しかし、パニウムの戦いである第三の代理戦争は、同時に第三次世界大戦をも開始するのである。

次回の記事でこの研究を続けます。

車輪のように複雑なものがケルビムの翼の下にある手の導きに従っていたように、人間の出来事の複雑な推移もまた神の統御のもとにある。諸国の争いと騒乱のただ中であっても、ケルビムの上に座しておられる方は、いまなお地上の事柄を導いておられる。

それぞれに割り当てられた時と場所を次々に占め、自らはその意味を知らぬままその真理の証しとなってきた諸国の歴史は、私たちに語りかけている。今日のすべての国々とすべての個人に、神はご自身の大いなる計画の中でそれぞれの位置を定めておられる。過ちのない方の御手にある測り縄によって、今日、人々も国々も量られている。すべての者は自らの選択によって自らの運命を定めており、神はご自身の目的を成就するために、すべてを御旨のもとに治めておられる。

偉大なる「わたしはある」がおん言葉のうちに、永遠の昔から永遠の未来に至るまで、預言の連鎖の環を一つひとつつなぎ合わせて描き出された歴史は、時代の行進の中で私たちが今日どこに位置しているのか、そしてこれからの時に何が起こると予期すべきかを教えている。これまで成就すると預言されたすべてのことは、今日に至るまで歴史のページに刻まれてきており、なお将来に起こるべきすべてのことも、その順序どおりに必ず成就することを、私たちは確信してよい。

すべての地上の支配が最終的に覆されることは、真理の言葉のうちに明白に予言されている。イスラエルの最後の王に対して神からの判決が宣告されたときに語られた預

言の中に、次のメッセージが与えられている：

「神である主はこう仰せられる。宝冠を取り除け、王冠を取り外せ。… 低い者を高くし、高い者を低くせよ。わたしはそれを覆し、覆し、覆す。それは、それが正当に属する方が来るまで、もはやなくなる。わたしはそれをその方に与える。」エゼキエル書 21:26, 27.

イスラエルから取り上げられた王権は、バビロン、メディア・ペルシア、ギリシャ、ローマの諸王国へと次々に移っていった。神は言われる、「それは、正当な権利を持つ方が来るまでは、もうない。わたしはそれを彼に与える。」

その時は間近にある。今日、時代のしるしは、私たちが偉大で厳粛な出来事の門口に立っていることを告げている。私たちの世界のすべてが騒然としている。私たちの目の前で、救い主がご自身の来臨の前に起こると預言された出来事が成就しつつある。「あなたがたは戦争と戦争のうわさを聞くであろう。… 民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に飢饉と疫病と地震が起こるであろう。」マタイ24:6, 7.

現在は、生きているすべての人々にとって、極めて大きな関心の的となっている時である。統治者や政治家、信任と権威の地位にある人々、そしてあらゆる階層の思索的な男女は、私たちの周囲で起こっている出来事に注視している。彼らは、諸国間に存在する緊迫し不安定な関係を見守っている。彼らは、この世のあらゆる要素を支配しつつある激しさを見て取り、重大かつ決定的な何かが起ころうとしている-世界が途方もない危機の瀬戸際にあることを悟っている。

天使たちは今、争乱の風が、世界が迫り来る破滅について警告を受けるまでは吹かないよう、それを抑えている。しかし、嵐は募りつつあり、今にも地上に襲いかかろうとしている。そして、神が天使たちに風を解き放てと命じるとき、筆に尽くせないほどの争乱の光景が現れるだろう。

聖書、ただ聖書のみが、これらの事柄について正しい見解を示す。ここには、この世界の歴史における大いなる終末の場面が啓示されている。これらは、すでにその影を前もって投げかけ、その接近の響きが地を震わせ、人々の心を恐れのあまりくじかせている出来事である。

「見よ、主は地をからにし、荒れ果てさせ、ひっくり返し、その住民を四方に散らす。…彼らは律法に背き、掟を変え、永遠の契約を破った。それゆえ、呪いが地を食い尽くし、その中に住む者は荒れ果てた。…手鼓の喜びはやみ、喜ぶ者の騒ぎは終わり、豎琴の喜びはやむ。」イザヤ書 24:1-18

「ああ、その日はわざわいだ！主の日は近い。それは全能者からの滅びのように来る。…種は土塊の下で腐り、穀倉は荒れ果て、蔵は打ち壊された。穀物が枯れたからだ。獣はなんと嘆くことか。牛の群れは牧草がないので途方に暮れ、羊の群れさえも荒れ果てた。」 「ぶどうの木は枯れ、いちじくの木はしおれた。ざくろの木も、なつめやしの木も、りんごの木も、野のすべての木までも枯れた。人の子らから喜びが枯れ去ったからである。」ヨエル書 1:15-18, 12

「わが心のただ中が痛む。… 私は黙ってられない。ああ、わが魂よ、おまえはラッパの音、戦の警鐘を聞いたからだ。滅びに次ぐ滅びが叫ばれている。全地が荒らされた

からだ。」

「私は地を見た。見よ、それは形なく、むなしく、天には光がなかった。私は山々を見た。見よ、それらは震え、丘はみな揺れ動いていた。私は見た。見よ、そこには人はひとりもおらず、天の鳥はみな逃げ去っていた。私は見た。見よ、実り豊かな地は荒れ野となり、そのすべての町々は打ち壊されていた。」エレミヤ書 4:19, 20, 23-26.

「ああ！その日は大いなる日で、それに比べるものはない。まさにヤコブの苦難の時である。しかし、彼はそれから救い出される。」エレミヤ書 30:7. 教育、178-181.